

卷頭言

〈小特集〉
交流と再生の地、京都：
〈よみがえりの都市〉としての相貌

Waves of Exchange and Regeneration:
Kyoto's Cultural Experience from Ancient to Modern Times

Kyoto has a long cultural history and has gone through the waves of political and economic fluctuations as well as numerous wars. It naturally has had levels of exchange and regeneration. Kyoto, which is apt to be considered as a representative of a “Japanese” place, is actually a multicultural city where foreign cultures and various cultures of Japan have joined and been refined. Due to its urban functions from ancient times to the present day, there also have been exchanges between lower and upper classes and interacts of values of the past and the present. Moreover, as Kyoto has been the religious center of Japan for over 1000 years, it is a boundary land where spiritually different levels of time and space interact. One can observe exchanges between the living world and the world after death at nearby places in this city, while the real-world vitality is regenerated by its intercommunication with the other world to which the spirits of our ancestors belong. The purpose of this special issue is to highlight Kyoto as a place of intercommunication and regeneration of people and their cultures at different levels. In this special issue, six articles are classified into three themes: “Living and Culture,” “Passion and Space-between,” and “Gaze and (Re-) Creation.” I would like to propose this issue to assert that the living culture constantly renews itself by the communication

with tradition. Active exchanges with the outside world and/ or alienated world become the source of regenerative power for contemporary Kyoto. Kyoto, thus, represents a “city of resurrection” before it is solely “Japanese.”

文化的な歴史が長く、戦火はもちろんのこと、政治や経済の変動の波を何度もくぐり抜けてきた京都には、さまざまなレベルでの交流と再生があった。ごく一般的に「日本的な」場所の代表として考えられがちな京都であるが、実際の京都はこれと異なり、外国文化および日本各地の諸文化が合流し洗練されてきた、多文化都市である。しかも、現実的な異文化接触のみならず、精神的な異時間、異空間が交流する境界的な性質を持つ場所である。本特集は、交流と再生の地としての京都を浮き彫りにすることを目的としている。掲載の諸論文は、異国文化・異言語の交流が愉しまれた京都、古代から現代まで都市機能を果たしていることによる異時間の交流や文化の奥深さ、下層・上層階級や異職階級層間の交流と摩擦、死者の霊などが属す異世界と生者世界との交流が生む現実世界の活力などを、具体的な事例研究をもとに明らかにしている。伝統とのつながりと外界との積極的な交流が再生力の源となるという本特集の主張を、現代社会への前向きな提言としたい。

本特集では、それぞれに特色のある6論文を「生活と文化」「情念と空間」「視線と創造」の3つのテーマに分類して掲載した。各論文は、中世から現代に至る京都をその周辺地との関連も含みながら考察している。人々は何を思い、何をして、彼らの「京」あるいは「京都」を作り出し、かつ継承してきたのか。各論者が浮き彫りにする京都の文化は、人間の営みとしては普遍的でありながら、営みの場所が京都でなければならなかったという独自性をもまた、明らかにしている。

「生活と文化」に収めた三枝論文は、戦乱の続く16世紀の京都における民衆の生活と文化の様相を、京都市北西部に位置する北野社の下級神職「宮仕(みやじ)」の日記から分析している。宮仕は北野社の経営を末端で支えつつ、

「家」を営み、連歌を嗜みながら神社内外の人々と交流を深めていた。これに対して、庵造論文は7世紀から京都と交流のあった朝鮮を意識しながら、京都に根付いた朝鮮文化としての「焼肉」に注目した。特に戦前期から定住している在日の人々の生活や近隣日本人との交流を、西大路御池駅に近い西ノ京の焼肉屋を紹介しながら、コミュニティの創造という観点から論じている。

続く「情念と空間」を扱う2論文のうち、ウェルズは洛北地域における中世以来の伝説を扱う。〈小野小町〉〈小栗判官〉〈鉄輪〉はどれも、古代から中世へ至る京都の秩序が孕む矛盾と情念を描いている。秩序の矛盾は人に破壊的な情念を生じさせるが、それを、深泥池から貴船神社に至る地域の神秘性・境界性が吸収し、秩序を逸脱した人々あるいは秩序から疎外された人々と彼らの霊の再生を促しているのである。西岡は、北の岩倉妙満寺と西の嵯峨野妙心寺に、それぞれ奇妙な縁を得て残された二つの鐘の話を紹介する。妙満寺にある〈道成寺の鐘〉は、怨念や執着にまつわる安珍清姫伝説を携えながら、能楽や歌舞伎といった芸能のモチーフのなかで物語の再創造を繰り返し、今に至る。妙心寺に残る〈南蛮寺の鐘〉は、各地を流転して再び京都に戻り、16世紀に南蛮寺に生きた宣教師たちの医療や福祉の精神が京都に再生し根づくのを見届けている。

「視線と創造」に収めた2論文では、外部の人々に京都をどう見せるのかということと、外部の人々が京都をどう見るのかという視線の問題を取り上げ、見つめ見つめられた後にどのような「京都」が創造されたのかを示している。花崎は、大岡昇平と富永太郎という文学者について、作品における京都での交流と文学上での再生をミクロ的に扱うとともに、京都盆地の東側を水の流れと逆行して北行する疎水を舞台に、女性主人公の再生を描く大岡の作品を通して、京都の持つ精神的な治癒力をあぶり出した。他方、川内は1873年の京都博覧会で京都が西洋人にどう提示され、かつその提示がどう修正されたのかを指摘して、京都という文化都市のコンセプトのマクロ的展開

を暗示した。

最後に収めた川内論文に明らかな「京都」イメージ創造から逆照射して、昌頭に収めた三枝論文が示す現実の都市、京都の創成まで、6本の論考を全体として扱えば、京都が過去・現在・未来という時間的な広がり展開する多文化や異世界同士の交流と、京都盆地とその周辺から世界各地につながる空間的な広がり交流する文化、の両方によって特徴付けられている都市であることを、読者は改めて認識するのではないだろうか。私たちは、京都を〈よみがえりの都市〉だと考えた。本特集が示した、京都の文化的な奥深さ、貪欲なコスモポリタン性こそは、古代に成立したこの都市を現代の京都たらしめた原動力であろうと思う。

読者には、分野も視点も異なる6本の論文を、気軽に楽しんでいただけたらうれしい。なお本特集では、専門領域の枠を超えてお読みいただけるよう、説明や文体は平易を心がけ、必ずしも学術論文の体裁をとらなかったことをお断りしておく。

本特集は、「京文化に関する学際的国際研究：交流と再生の場としての京都」の課題で、2016年度から3年間にわたり人文科学研究所助成プログラムより研究費を受けて行われたプロジェクトの成果である。研究助成してくださった立命館人文科学研究所に深くお礼申し上げます。

2019年12月

立命館大学文学部
ウェルズ 恵子